

1. さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」(7:37)
 - a. 仮庵の祭りは一年のうちの最後の祭りで、その終わりの大いなる日にイエスは聞く者に対して招きをする。この招きは渴く者すべてを対象にしている。
 - b. 渴きはイエスの招きを受け入れるための必要条件である。あなたは神に対して飢え渴いているだろうか？ 私たちは皆、何かに対して渴きを持っているが、罪によって惑わされ、本当の満足を得られないものを追い求めてしまう。
 - c. イエスは、私たちが求めていたものにとって代わるものを与えてくださろうとしている。イエスの招きに応じるには、渴きを癒すために求めていた他のものを拒絶しなければならない。

2. 「わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったため、御霊はまだ注がれていなかったからである。(7:38-39)
 - a. イエスが与える水は私たちが満たしてくださるだけでなく、ひとりひとりの心の奥底に生ける水の川が流れ出るようにしてくださる。この水を飲むにはまず私たちが渴き信じることである。
 - b. これは外からの環境では潤すことのできない内側からの満たしである。イエスの招きは、この世のものは一時的に過ぎず一時的にしか渴きを満たすことができないと知る知恵のある者すべてに対して向けられている。
 - c. これは私たちの心の一番深い部分を満たすことができるだけでなく、私たちの内に生ける水の川を生み出す。この水は私たちの内側に触れて変えてくださるだけでなく外側にも効果をもたらす。
 - d. イエスは聖霊のことを話されたのである。あなたのうちにも生ける水の川が流れているだろうか？もしそうでなければもう一度渴く過程を繰り返し、信じてイエスのもとに来よう。

3. このことばを聞いて、群衆のうちのある者は、「あの方は、確かにあの預言者なのだ」と言い、またある者は、「この方はキリストだ」と言った。またある者は言った。「まさか、キリストはガリラヤからは出ないだろう。」(7:40-41)
 - a. イエスが語った言葉はありふれたものではなかった。その宣言は群衆を二分し、ある者はイエスのことを「あの預言者(モーセの次に来る預言者、申命記 18:15)」、ある者はメシヤだと言った。イエスのことばには民衆を掻き立てる何かがあった。
 - b. その言葉には人々の注意を引く威厳があったが、神は多くの場合私たちが応答する余地を残しておられる。神は私たちが招き、その言葉には力があるが、私たちがそれを受け入れるのか拒否するのか応答する必要がある。

4. 「キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか。」そこで、群衆の間にイエスのことで分裂が起こった。その中にはイエスを捕らえたいと思った者もいたが、イエスに手をかけた者はなかった。(7:42-44)
 - a. 「知識のある」人たちの中には、自分は神の招きを受ける必要がないと考えている人もいる。彼らは聖書を良く知っているので神のこともわかっていると思っていたのである。残念なことに彼らは聖書の知識は持っていたが、目の前にいるその著者には気付かなかったのである。
 - b. 人々はイエスが目の前におられたにもかかわらず聖書の内容とイエスの生い立ちについての正しい理解がなかったために神の声が聞き取れなかったとはなんと悲惨なことだろう。もし初めに事実を確かめていればイエスはメシヤとしての条件をすべて満たしていたことに気付いたはずであるが、プライドのためにそれをしなかったのである。
 - c. 神の声を聞き分けられるようにし、聞こえたらそれがどんな形であろうと自分を低くし、イエスが再び来られる日を逃さないようにしたい。